



二冊ふたつのノート

なんだかふしぎに思いながらもパラパラとノートをめくる。

それはどうやら、庭にわの管理かんりノートだった。

日付ひづけと、その日ひになにをしたのかが書いてある。

日付ひづけは一月がつから始はじまっていた。

一月七日がつなのか 雪ゆきが降ふる。雪ゆきかきをする。七草ななくさをつんで粥かゆにする。

へえ、七草ななくさが採とれるんだ。

七草ななくさってあれだね。

セリ、ナズナ、ほかには……たしか、ゴギョウ、ハコベ、ホトケノザ、スズナ、スズシロ、だったかな。

スズナはカブで、スズシロは大根のことだったような……。それを入れたお粥を一月七日に食べるって、聞いたことがある。

とおも と思い出しながらどんどんめくつていくと、五月のページになった。

五月一日 雑草とり、水やり。高橋さんが苗を持ってきてくれたから、植えつけ。

五月二日 肥料作り。生ゴミをまとめてコンポストに入れる。

五月三日 ラベンダーの剪定、水やり。

五月四日 スズランが咲く。つんで花瓶に飾る。

五月六日 バラのつぼみがふくらむ。日あたりをよくするために枝を整理。

メモ書き程度だけれど、ほぼ毎日つづいている。

最後のページまでざっと見ると、ふと目にとまる文があった。

『ふゆくんはやさしすぎて生き物を育てるのが苦手だから、庭は菜乃葉にまかせます。』
はあ……？

「これなに？」

わたしは蒼井くんに問いかけた。

ふゆくんというのは、おそらく彼のことだろう。

その親しげな呼び方がなんだか気にさわった。

だって、おばあちゃんの孫はわたしなのに。

あと、やさしすぎるっていうほめ言葉。なんだかずるい。

すると蒼井くんは、ちよつと苦笑いをしてため息をついた。

「おれがやると、命を吸い取るから。」

うつむいた蒼井くんの顔はどこか陰がさしていた。それがきれいな顔立ちに、ふしぎな
迫力をそえていた。

なんだか、人じやない、みたい。

ふと、そんな考えがよぎる。



まさか、^{おも}と思いながらも、つい口がすべった。

「命^{いのち}をつて……吸血鬼^{きゅうけつぎ}じやあるまいし。」

すると蒼井^{あおい}くんはあきれたように笑^{わら}った。

「吸血鬼^{きゅうけつぎ}が吸^すうのは、命^{いのち}じやなくて血^ちだけど……つて、あんた、さ。さつきの妖精^{ようせい}とい
い、ファンタジーとか好き^すきな人^{ひと}？」

——ハッ!!

あああ、またやっちゃった！

恥ずかしいい！

グツと言葉につまっていると、蒼井くんははじけるように笑う。

その顔からは陰が消えていて、あれは見まちがいだったかな？　と思う。

「つまりさ、おれが世話すると枯れるんだよ。」

「え、この庭がこんなふうになったのって、蒼井くんのせい？」

今の言い方だと、彼が庭の手入れをしてたってことになる。

それでこのありさま。それはひどい。

びつくりしていると、彼はちよつとバツが悪そうな顔になった。

「……まあな。だからなんとかしろ。こっちは命がかかってるんだ。」

「命？」

おおげさすぎない？

と思つたけれど、蒼井くんは真剣な顔をしていた。

「それに……なんとかしろって言われても。」

本気かどうかかわからないけど、なんとなく冗談で流していい感じじゃなかった。

え、なに、事情あり？

ちよつと心配になつていると、彼はニヤリと笑う。

「あんた、だいぶ詳しそうじゃん。助っ人登場で助かった。」

え、助っ人！？

つて、この庭の世話、押しつけられそうになつてる！？

この荒れ放題の庭を！？

うっわ、どう考えても重労働！

ムリムリ、面倒ごとはいやです！

「そ、そんなことないよ？ 助っ人とか、ムリだし。」

でもさつき「この庭はわたしのもの」つて言つちやつたし。

うう、断れない気がする。

気まぐれて目をそらすと、蒼井くんが、わたしの顔をのぞきこむようにして言つた。

「いや、さつきだつて、苗を見ただけで、なんの植物かわかつてた感じだったじゃん。

通、わかんないだろ。」

普

「好きなものは、なんとなくおぼえちゃうだけだよ。」

そう言いながら苗を見おろしたわたしは、ハツとした。
苗がぐったりしている。

え、なんだかすでに弱って、ない？

思わずしやがみこんでふれる。

トマトの苗は茎がそばに立てた支柱にもたれるようだし、キュウリもなんとなく葉っぱにハリがない。

カボチャも葉っぱが黄色くなっているし、サツマイモは葉っぱがしなびている。
イチゴの葉はなにかに食べられたあとがある。

でもそれだけじゃない。

よく見ると、茎の根元がなんだか黒っぽくて、ぐらぐらしている。
唯一元氣そうなのはシソだけ。

「これ、いつ植えた？」

わたしは蒼井くんを見上げた。

「五月一日。一週間前しゅうかんまえかな。その『庭造りにわづく』ノートに書かいてあるとおりにやつてる。」

「一週間前？」

だとすると、普通ふつうなら、もう根ねづいてて、こんなに弱よわつてるはず、ない気きがする……。

さっきの言葉ことばが耳みみによみがえる。

——おれが世話せわすると枯かれるんだよ。

え、あれって、ほんと？

ってことは、命いのちを吸すい取るつてのも……ほんと？

そんなわけないと思おもいつつ、かすかなうたがいがわき上あがったとき。

蒼井あおいくんはちよつと眉根まゆねをよせてわたしを見みた。

「さっきの、信しんじる気きになつた？」

そう言いって笑わらった顔かおは、どこか悲かなしそうだった。

わたしは気きになりつつも、すぐに否定ひていする。

一瞬いつしゅんでも信しんじかけた自分じぶんがバカみたいだった。

「そんなわけないじゃん。こうなつたのは、ぜつたいほかに原因げんいんがある。」

確信かくしんを持つて言ういと、蒼井あおいくんはぽかんとした顔かおになった。

「ほかに原因げんいん？ おれ以外いがいに？」

わたしはうなづく。

「当たり前まえだよ。命いのちを吸すい取とるとか、そんな非科学ひかがくてきなことじゃなくって、もつと科学かがくてき的な原因げんいんに決きまつてる。」

「科学かがく……。」

蒼井あおいくんはじつとわたしを見みつめてくる。

その瞳ひとみは少し青あおみがかつていて、なんだか海うみの底そこを思おもわせる。

吸すいこまれそうな気分きぶんになったわたしは、ハッとして目めをそらす。

うわ。

そーいう目めで見みるの、やめて！

人ひととの距離きょりの取とり方かた、もともとよくわからないのに、男おとこの子ことか、ぜんぜんムリ!!

蒼井あおいくんはニヤツと笑わらった。

「非科学ひかがくてき的てきって……妖精ようせいとか吸血鬼きゅうけつぎとか言いってたくせに？」



「それはもう忘れて！」

ドッカン、と頭が噴火しそうになる。

黒歴史！

あれは、受験のためにたくさん本を読んだだけです！！

たまたま読んだのがファンタジーだっただけで！！

とはいっても、お母さんは、ファンタジーは、受験にはあんまり関係ないでしょってい

い顔しなかったけど……。

とにかく！

フィクションとノンフィクションのちがいくらい、ちゃんとわかりますから……！！

そもそも蒼井くんが人間ばなれした美少年だから、話がややこしくなってるだけで

……！！

って言いたいけど言えるわけないじゃん！

本人に面と向かって美少年とか言えないよ！

そのくらいのことは、わかってる！

と思おもいながらも、わたしは言いった。

「だ、だから！ 命いのちを吸すい取とるとかそういううさんくさい理り由ゆうじゃないって、わたしが証しょう明めいしてみせるから。」

頭あたまのどこかでは、ぜったい面倒めんどうごとに巻まきこまれるから、関かかわつちやダメおもって思うんだ
けど……。

苗なえが枯かれちゃうのはなんだかいやだし、そもそも枯かれるのはどうしてなんだろうってふ
しぎだし。

それに。

蒼井あおいくんが一瞬いつしゆん見みせた、なにかをこらえているような表ひょうじよう情ぎが気きになつてしょうがなかつ
たんだ。